

都市住民の日常生活における「親しい人々」とのつながりと役割 - メキシコ、グアナフアト州レオン市における事例 -

野内 遊

1 はじめに

メキシコに限らず、都市は様々な多様性に満ちている空間である。そのため、アプローチの仕方、また、問題意識によって、都市は異なった姿を私たちの前にあらわすことになる¹。そして、都市以上に多様性に満ちていると考えられるのは、都市に住む人々の生活様式である。メキシコは、スペイン系を中心とするヨーロッパ系白人、先住民、そして、ヨーロッパ系白人と先住民との混血でメスティソと呼ばれる人々で構成されている多民族、多文化国家²である。また、他のラテンアメリカ諸国同様、階層間の格差³が著しいといわれている社会でもある。そのため、メキシコの都市は階層という点だけでなく、文化的にも多様な集団が生活している空間であると考えられる。メキシコの都市が多様性に満ちている空間であることは、都市に生活の基盤を移した先住民の中に、依然、先住民としてのアイデンティティや生まれ育った村との結びつきを保持している人々が存在していることから、うかがい知ることができる⁴。

これまで、メキシコの都市住民に焦点を当てた研究では、低所得層の人々、特にメキシコ・シティに住む人々に多くの関心が払われてきた。低所得層の人々とは、一般的に肉体労働と結びついていると考えられている人々である（田中 1994）。このような階層に属する人々に焦点を当てた代表的な先行研究として、オスカー・ルイスの『貧困の文化』と『サンチェスの子どもたち』を挙げることができる。ルイスは、観察を通じて、低所得層には低所得層特有の価値観や生活習慣があるという指摘を行っている（ルイス 1985）。パトリック・オスターは、ルイスの手法を参考に、『メキシコ人』において家政婦やゴミ捨て場住人、農民など様々な職業に従事する 20 人の人々に焦点を当てることによって、メキシコ社会が抱える貧困や格差の問題というものを浮かび上がらせようとした。

日本でも、増山久美がメキシコ・シティに住む低所得層の日常生活、特に家族の中の女性成員によって取り結ばれる紐帯に焦点を当てた研究を行っている。

今回の調査の大きな目的は、前述の先行研究では焦点を当てられることのない事柄に焦点を当てるということである。既に述べたように、従来の研究では主に低所得層の人々、特にメキシコ・シティに住む人々に多くの関心が払われてきた。そこで、今回の調査では、メキシコ・シティ以外の都市に住む低所得層に属さない人々を調査対象に選んだ。そして、具体的には、そのような人々の日常生活における「親しい人々」との結びつきとその役割についての調査を行った。本稿では、「親しい人々」を調査協力者たちと何らかの援助関係(助言、物の貸し借り、金銭的援助、家事の手伝いのような無形のサービスの援助)のある人々をあらわす言葉として用いる。

本稿において、このような結びつきに注目する理由は、このような結びつきが、通常、目に付かないものであるのにも関わらず、都市住民の日常生活において、重要な役割を果たしていると考えられるからである。彼らはどのような人々を自身の「親しい人々」ととらえているのだろうか。また、具体的にどのような交流を彼らの「親しい人々」と行っているのだろうか。本稿では、主にこの2点についての考察を行う。

今回の調査では、メキシコ中央高原に位置するグアナファト (Guanajuato) 州レオン(León)市を調査地域として選んだ。レオン市は、製靴産業を基幹産業として持ち、人口100万人を超える大都市であり、地域の主要都市であるということがレオン市を調査地域として選んだ理由の1つである。また、メキシコ中央高原に位置するレオン市は、アメリカ合衆国の影響の強さが指摘されるメキシコ北部のティファナ (Tijuana) のような都市や先住民人口の多いため独特な伝統が残っているメキシコ南部のオアハカ (Oaxaca) のような都市に比べると、地域的特色が比較的目立たない、平均的なメキシコの産業都市であると考えられる点も今回の調査地域に選んだ理由の1つである。

調査は、レオン市の東部に位置するブーガンビリアス (Bugambillas) 地区に住む中間層に位置すると考えられる人々を対象にして行った。メキシコでは一般的に中間層は上部と下部に分けられている。中間層上部は中小企業経営者や医者などで、メイドを雇い、米国志向が強いといわれている。一方、中間層下部は、メイドを雇うことはなく、職業は、公立学校教員や中小企業社員などであり、高等教育機関への進学率は高いといわれている。田中都紀代は、「メキシ

「この社会階層と子どもたち」において、この階層を日本の中間所得層に一番類似した生活をしていると指摘している（田中 1994）。

中間層上部と中間層下部を区別する目安として、おそらく、適切なのはメイドを雇う金銭的余裕があるのかないのかという点だと思われる。禪野美帆によると、メキシコ・シティでの通いの（住み込みでない）メイドの賃金の相場は、2002年、1日6時間働くと約150ペソ（約2000円）であった（禪野 2006）。例えば、週5日働きにくる通いのメイドを雇うためには、自分や家族を養う収入以外に、1ヶ月3000ペソ（約40000円）必要である。今回の調査協力者たちでメイドを雇っている人々は皆無であった。調査協力者たちは、本稿第4節の「親しい人々」との援助関係においてふれているように、家事などの日常生活における雑務は、自分で、または「親しい人々」に援助してもらおうという人々である。

2 調査方法と調査対象者のプロフィール

本稿では、筆者がレオン市ブーガンビリアス地区において2005年2月15日から2月26日におこなった聞き取り調査から得られたデータを分析することによって、都市住民の日常生活における「親しい人々」との結びつきと役割について考察を行う。

今回の聞き取り調査はブーガンビリアス地区にあるE通りに居住するS家の人々を起点にして、彼らに近隣の人々を紹介してもらおうという手順をとった。本調査におけるインタビューは全てスペイン語で行い、インタビューを申し込む際に氏名を公表しないという条件でインタビュー調査を依頼した⁵。またインタビュー前にインタビュー内容を録音することの許可を求めた。このような条件を提示した上で、今回6世帯12人の人々がインタビュー調査に協力してくれた。

表1 調査協力者たちのプロフィール

	年齢	性別	職業・身分	居住地
A	50代	男性	元銀行員	E通り
B	50代	女性	主婦	E通り
C	30代	男性	弁護士	E通り

D	30代	男性	会社員	E通り
E	60代	女性	主婦	E通り
F	60代	女性	主婦	S家から車で約10分
G	20代	男性	求職中	S家から車で約10分
H	60代	女性	主婦	S家から徒歩約5分
I	20代	男性	会社員	S家から徒歩約2分
J	50代	女性	主婦	E通り
K	20代	男性	レストラン勤務	E通り
L	20代	女性	店員	E通り

出所) 聞き取り調査より筆者作成。

表1は、調査協力を得られた12人の人々のプロフィールを示している。簡単に、今回の調査に協力してくれた人々のプロフィールを補足する。A、B、C、DはS家の人々である。S家は、現在A(父親)、B(母親)、C、(息子)、D(息子)の4人で裏庭付きの2階建ての家に住んでいる。家長であるAは、元々銀行で働いていた。現在は、月曜から金曜日まで、車で約1時間かかるところに住んでいる自分の父親の介護を行うことに専念している。Aの妻であるBは専業主婦である。A、Bには、C、D以外にも、既に結婚して独立している3人の子どもたちがいる。Cは大学で法学を学び、弁護士の資格を持っている。また、Cは経営学の修士号を持っている。現在は弁護士としての活動をしながらも、修士課程で学んだことを生かすために大企業での就職を目指している。Dも大学卒である。現在は、レオン市郊外にあるプラスチック製の使い捨ての食器を製造する会社にホワイト・カラーとして勤務している。Eは、S家の隣に、夫と義理の両親2人と住んでいる。Eは専業主婦である。彼女は、夫との間に、既に独立している息子と娘がそれぞれ1人いる。FはEの姉である。Fも専業主婦である。Fには、Gを含めて、3人の子どもがいる。EとFは、もともと、メキシコの南部の州であるチャパス(Chiapas)州の出身である。彼女たちによると、彼女たちが10代後半の時に一家そろってグアナファト州に移住してきたという。Fの息子であるGも学士号を持っている。しかし、求職中であるという(2005年2月現在)。Gは、木曜日の午後、母親であるFとともに、叔母に当たるEの家で過ごすことが多いという。Hも専業主婦である。B、E、F、H

は、編み物という共通する趣味を持っている。また、彼女たちは毎週木曜日の午前中に、15人ほどの主婦が参加する朝食会に参加している。そして、朝食会の後、Eの家で編み物や雑談をしながら午後を過ごすということが習慣であるという。Iは、S家の息子である、C、Dと古くからの友人である。Iは大学で経済を学び、電話会社に勤めている。Jは、息子であるKと娘であるLと3人で、E通りの中でも比較的大きな家に住んでいる。Jは自宅の空き部屋を下宿として貸している。また、1階部分の一部を美容院に貸している。Kは大学で美術を学んでいたが中退し、レストランで給仕として働いている。Lは文房具屋で働いている。

今回の調査では、上記の12人の調査協力者たちに対して、同居している家族以外で最も親しいと感じる人々について聞いた。結果としては、表3に示してあるように、個人差はあるが、それぞれの調査協力者は2人から5人の人々を自身の「親しい人々」として挙げた。今回のインタビュー調査では、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」(合計36人)との関係や「親しい人々」との具体的な交流内容について聞いていった。また、調査協力者たちの日常生活をより詳しく知るために近隣に住む人々との関係についてもインタビューで聞いた。

表2「親しい人々」との関係と援助内容に関する質問文

- | |
|---|
| <p>1) 「同居する家族以外で、あなたが相互援助を行う人々は何人いますか」</p> <p>2) 「それでは、それらの人々の中で、あなたが最も親しいと感じる人々はどの種類の人々ですか」</p> <p>1:両親 2:兄弟姉妹 3:伯(叔)父、伯(叔)母 4:いとこ 5: 近隣の人 6: 学校時代の友人 7: 職場の同僚 8: その他</p> <p>3) 「その人と知り合ってどれくらいたちますか」(親族以外の場合)</p> <p>4) 「その人はどこに住んでいますか」</p> <p>5) 「その人の家へ行くには、車でどれくらいかかりますか」</p> <p>6) 「その人とはどのくらいの頻度で交流しますか。また、その方法は何ですか」</p> <p>1: 直接会う 2: 電話 3: 手紙 4: その他</p> <p>7) 「その人と会う時は、どこで会いますか」</p> <p>1: 自宅 2: 相手の家 3: お互いの家 4: 路上 5: その他</p> <p>8) 「その人と会う時、どのような活動をしますか」</p> <p>9) 「あなたはその人をどのように援助しますか」</p> |
|---|

1: 家事などのサービスの援助 2: 物の貸し借り 3: 金銭的援助 4: 助言
 10) 「その人はあなたをどのように援助しますか」
 1: 家事などのサービスの援助 2: 物の貸し借り 3: 金銭的援助 4: 助言

表 3 調査協力者たちと彼らの「親しい人々」との関係と居住地

	1	2	3	4	5
A	義姉(市内)	義姉(市外)	義母(市内)		
B	息子(市内)	姉妹(市内)	姉妹(市外)	兄弟(市内)	娘(市外)
C	友人(市外)	兄弟(市外)	祖母(市内)	友人(市内)	
D	祖母(市内)	友人(市内)	友人(市内)	友人(市内)	
E	姉妹(市内)	姉妹(市外)			
F	姉妹(市内)	娘(市内)			
G	友人(市内)	義兄(市内)	兄弟(市内)		
H	友人(市内)	友人(市内)	友人(市内)	友人(市内)	
I	友人(市内)	友人(市内)	友人(市内)		
J	友人(市内)	友人(市内)			
K	友人(市内)	友人(市内)			
L	友人(市内)	友人(市内)			

出所) 聞き取り調査より筆者作成。

3 「親しい人々」との結びつき

表 2 は今回のインタビュー調査で用いた質問文である。表 3 は調査協力者たちが実際にインタビューで答えた彼らの「親しい人々」との関係と居住地を示している。表 3 にある 1 から 5 までの数字は調査協力者たちが該当する人物をインタビューで挙げた順番を示している。

まず、インタビューにおいて親族を自身の「親しい人々」として挙げた人々の居住地について焦点を当ててみる。最も遠くに居住する親族を、自身の「親しい人々」として挙げたのは B である。彼女は、レオン市から車で 3 時間ほどかかるケレタロ(Queretaro)州に住む娘とアメリカ合衆国に住む姉を自身の「親しい人々」と答えた。E も、レオン市から車で 1 時間ほどにあるイラプアト(Irapuato)市に住む姉を「親しい人」とインタビューで答えた。

C、D、F、G がインタビューで答えた親族はレオン市在住である。ただ、レオン市は人口 100 万人を越える大都市であるため、調査協力者たちが親しいと感じる親族たちの居住地は距離的には様々である。例えば、C の「親しい人」である彼の弟は、同じレオン市内に居住しているにもかかわらず、C の自宅から車で 1 時間ほどかかる場所に住んでいる。それに対して、最も距離的に近い親族をあげたのは F である。F は、自宅近くに住んでいる娘と車で約 10 分のところに住んでいる E を自身の「親しい人々」としてとらえていた。

今回の調査協力者たちが、インタビューで挙げた親族たちは、ある程度、距離的に離れた場所に居住していた。このような居住形態は低所得層において見られるような、例えばある通りに複数の親族が居住するという、近住拡大家族と呼ばれるような形態とは明らかに異なっている⁶。もちろん、調査協力者たちは親族との間の相互援助の関係について、本稿第 4 節で考察しているように、インタビューで答えている。しかし、低所得層に見られるという、経済的側面に重点を置いた相互援助の関係⁷は今回の調査協力者たちには見られなかった。このように今回の調査協力者たちの居住形態や彼らの保持する相互援助の内容を低所得層の人々の居住形態と相互援助の関係を比較してみると、今回の調査協力者たちと低所得層の人々では居住形態と相互援助の内容において差異がみられるということがわかる。

調査協力者たちは親族だけでなく、非親族である人々、親友、との結びつきについてもインタビューで答えている。表 3 に示されているように、非親族である人々を自身の「親しい人々」としてとらえているのは C、D、G、H、I、J、K、L である。彼らは親族のみを自身の「親しい人々」として挙げた調査協力者たちに比べて、親族以外の人々と知り合う機会に恵まれていたといえるかもしれない。例えば、C、D、G、I は、学生時代に知り合った人々を自身の「親しい人々」として挙げている。I はレオン市から車で 1 時間ほど離れたグアナファト州の州都であるグアナファト市にある大学で経済を学んでいた時、部屋を共同で借りていた同級生を自身の「親しい人」として挙げた。I はレオン市内で電話会社に勤めている（2005 年 2 月現在）。I によると、その会社への勤め口も、以前その会社に勤めていた、その同級生から紹介してもらったという。D は、高校時代の友人を C と G は、大学時代に知り合った友人を自身の「親しい人々」として挙げている。このような事例を見ると、高校や大学といった高等教育を受ける機会というのは、また同時に、人々に親族以外の人々との関係

を結びつける1つの大きな機会を与えてくれる場所であると指摘することができる。そして、C、D、G、Iは、そのような機会を与えられる環境にあったと考えることができるだろう。もちろん、レオン市という人口100万人を超える大都市に住んでいる調査協力者たちには「親しい人々」と知り合う機会は学校以外の場所にもある。例えばKは以前勤めていた職場で知り合った人々を自身の「親しい人々」としてインタビューで答えている。また、Jは近隣に住んでいる人々を自身の「親しい人々」としてインタビューで答えている。このように、今回の調査協力者たちが保持する「親しい人々」との関係は、必ずしも、親族内で収まるものではなく、非親族の人々をも含んだより空間的に広がりのあるものであった。

4 「親しい人々」との援助関係

「親しい人々」との関係は、時に、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」を互いに精神的に、または物質的に支える役割を果たす。このような結びつきは、通常、目に見えることがなくとらえにくいものである。本節では、日常生活における、助言、物の貸し借り、金銭的援助、そして家事の手伝いのような無形のサービスの援助という4つの援助関係について調査協力者たちがインタビューで答えた代表的な事例を挙げて、彼らの日常生活における相互援助の関係をとらえてみたい。

今回の調査協力者たちは、助言に関しては、主に、個人的な悩みや周りの人との関係といった精神的な事柄に対する助言と相手にとって有益な情報を提供するという助言という2つのタイプの助言を彼らの「親しい人々」と行っていた。例えば、個人的な悩みや周りの人々との関係に関する事例としては以下のものがある。Eは、自分の姉が落ち込んでいる時に助言をして励ましたりすると答えている。また、Dは彼の「親しい人」が親や姉妹との関係で悩んでいるときに助言を行うという。このような個人的な悩みや人間関係についての悩み以外では、自分の知らない専門的な知識に関して彼らの「親しい人々」に助言を求めるといった事例があった。例えば、DやGは自分より専門的な知識を持つ自身の「親しい人々」に対して、保険や法律やコンピューターに関する助言を求めるとインタビューで答えている。

個人的な悩みや周りの人との関係以外の助言の中で、最も重要だと考えられるのは求人に関する助言や情報を得ることであろう。求職中(2005年2月現在)

のGは、自身の「親しい人々」に求人に関する助言や情報を求めるとインタビューで答えた。

Gのこのような行動の背景には、メキシコ特有の雇用形態がその背景にあると考えられる。メキシコの企業は定期的に新入社員採用をしておらず、欠員が出次第、随時、求人するというのが一般的であるといわれている⁸。従って、どこかの企業に勤めたいと望むならば、まず求人情報を入手しなくてはならない。実際に「親しい人々」からの求人情報によって職を得た例としては、電話会社に勤めている(2005年2月現在)Iを挙げることができる。「親しい人々」との援助関係は、時に、調査協力者たちの日常生活に新しい機会をもたらすものであるといえるだろう。

調査協力者たちと彼らの「親しい人々」との物の貸し借りや金銭的援助の関係を見ると、調査協力者たちが、物質的に、また、金銭的にそれほど困窮した生活を送っているわけではないことを示している。まず、物の貸し借りについて見てみると、調査協力者たちは、お互いに主に小物の貸し借りを行っているというインタビューで答えた。いくつか例を挙げると、Gは自身の「親しい人々」との間で工具、セーター、カセットやCDなどの貸し借りをしているという。Dも彼の「親しい人々」と本やCDの貸し借りを行っているという。また、B、E、Fなどの年配の女性は彼女たちの「親しい人々」と、彼女たちの「親しい人々」がレオン市内に住んでいる場合、調理用品やレシピの交換など、食卓に関する物の貸し借りを行うというインタビューで答えている。調査協力者たちがインタビューで答えた物の貸し借りは、日常生活に用いる小物が中心であり、高価なものや貴重品などの貸し借りは行われていないようであった。日常生活に用いる小物が貸し借りの対象となるため、調査協力者たちも気軽に物の貸し借りを行っているようである。

物の貸し借りが小物に限られていたのと同様に、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」の間における金銭的な援助のやりとりも、少額なものに限られていた。F、G、Iは、このような少額の金銭的な援助を行うというインタビューで答えた。GやIは、彼らの「親しい人々」との間に、ドルに換算すると50ドルから100ドルの金額をお互いに貸与したことがあるというインタビューで答えている。また、Fは、自身の「親しい人」とさらに少額である20ドルほどの金額の貸し借りをするという。このように今回のインタビュー調査では、比較的少額の金銭的援助関係のみが確認されただけであり、大きな額での金銭的な援助関係は

確認することはできなかった。

家事の手伝いのような無形のサービスの援助関係は調査協力者たちによって内容は異なっていた。例えば、Gは「親しい人々」が病気の時に彼らを医者に連れて行くということや引っ越しの手伝いや車での送り迎えなどを「親しい人々」に対して行うサービスの援助としてインタビューで挙げた。Iは、「親しい人々」の家の家事を手伝うという。また、車を運転するDは、「親しい人々」の送り迎えをすることをサービスの援助としてインタビューで挙げた。

ここまで、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」との間に見られる、助言、物の貸し借り、金銭的援助、サービスの援助について見てきた。事例が示すように、このような相互援助の関係の存在は、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」との結びつきがサポート・ネットワークとして機能しているということを示している。ただ、今回の調査協力者たちと彼らの「親しい人々」との相互援助の関係には、低所得層に見られるような経済的側面に重点を置くという個人や家族の生き残り戦略として機能を見ることはできなかった。

5 調査協力者たちの余暇活動

調査協力者たちにとって、余暇活動は彼らの日常生活において重要な役割を持っている。調査協力者たちと彼らの「親しい人々」は、日常生活において、様々な交流を行っている。インタビュー調査によると、交流は主にお互いの自宅で行うということが多いようである。交流の具体的な内容としてインタビューで挙げられていたのは、「親しい人々」と会話などをしながらともに過ごすというものであった。そして、会話の内容は、日常生活における些細な事柄から、スポーツやその他の趣味などの関心事や自身や家族が抱える問題までと、非常に幅広いものであった。例えば、Gは、義理の兄とサッカーについて話すという。また、AとBは、自身の親しい人と政治について話しをすると答えている。B、E、F、Hのような年配の女性たちは、自身の親しい人々とレシピの交換などに代表される料理が会話の話題としてのぼるとインタビューで答えている。このように、会話の内容は多岐に渡っていた。このような彼らの「親しい人々」との交流は、お互いの自宅で行われるため、彼らと同居している家族も会話に参加することになり、にぎやかなで楽しいものになるようである。

調査協力者たちの余暇活動は、「親しい人々」との交流だけにとどまらず、時に近隣に住む人々との交流も含まれることになる。このような、近隣の人々と

の交流を最も頻繁に行っていたのは、B、E、F、H、Jといった年配の女性たちであった。彼女たちは、他の調査協力者たちに比べて、かなり具体的に、近隣の人々との交流について答えた。例えば、Bは、近くに住む3人の人々に強い友情を感じているとインタビューで答えている。また、Bは、隣に住むEと共に、毎週木曜日に、女性のみ約15人が参加する朝食会に参加している。BやEによると、この朝食会は何か特定の目的があるわけではなく、朝食を食べながらおしゃべりを楽しむという性格のものである。この朝食会には、FやHも参加している。昼食会の後、彼女たちは、Eの家で共通の趣味である編み物をしながら午後を過ごすという。Jは、Bを自身の親しい人として挙げており、時には1日に何度もお互いの家を頻繁に行き来しているという。このように、B、E、F、H、Jといった年配の女性たちは他の調査協力者たちに比べると、より密接に近隣に住む人々と交流する傾向があった。

このような傾向が見られるのは、彼女たちが他の協力者たちに比べて、近隣の人々と交流する機会が多いということが考えられる。A、C、D、I、Kなどが、仕事などの理由により自宅を離れていることが多いことに対して、B、E、F、H、Jは家庭の中で家事を担当しているため自宅にいることの方が多いのである。彼女たちは、そのような家事仕事の合間にある余暇時間を使って近隣の人々との交流を行っていた。

6 課題と結論

本稿では都市住民の日常生活において、「親しい人々」との結びつきに焦点を当てた。それは、そのような結びつきが都市住民の日常生活において重要な役割を果たしていると考えたからである。特に、調査協力者たちがどのような人々を自身の「親しい人々」としてとらえているのか。また、具体的にどのような交流を彼らの「親しい人々」と行っているのかという2点についての考察を行った。

調査協力者たちは、個々人によって差があるが、2人から5人の親族(祖母、兄弟、姉妹、娘など)、非親族(学生時代、職場の友人など)を自身の「親しい人々」としてとらえていた。調査協力者たちと彼らの「親しい人々」の結びつきをネットワークとしてとらえると、そのネットワークは、市内、市外を含めて、空間的に幅のある広がりを見せていた。

親族との結びつきにのみ注目してみると、低所得層で依然見られるという近

住拡大家族という形態は今回の調査協力者たちには当てはまるものではなかった。このことは、調査協力者たちにとって、親族との関係の位置づけが低所得層の人々のそれと異なっているということを示唆している。

低所得層の人々との生活様式の違いは、「親しい人々」との援助関係の具体的な内容にもあらわれていた。低所得層における援助関係は、前述の増山が指摘したように、経済的側面に重点が置かれており、ある意味、個人や家族の生き残り戦略として機能しているのに対して、今回の調査協力者たちが彼らの「親しい人々」との間で行う援助関係では、金銭的援助や物の貸し借りは少額、小物に限られており、経済的側面というものはそれほど目立つものではなかった。もちろん、調査協力者たちは、助言（個人的な悩みや周りの人との関係といった精神的な事柄、自分の知らない専門的な知識、求人に関する助言や情報など）また、サービスの援助を彼らの「親しい人々」と行っており、彼らとの結びつきが、一種のサポート・ネットワークとして機能しており、調査協力者たちの日常生活の中で重要な役割を担っているということは間違いない。調査協力者たちは、「親しい人々」との結びつきを通じて余暇活動も行っている。調査協力者たちがインタビュー答えた余暇活動での交流内容は多様なものであった。ただ、調査協力者たちと彼らの「親しい人々」の交流は基本的小さいお互いの自宅で行われており、どこかに外出するということが一般的ではないようである。

都市住民の保持する彼らの「親しい人々」との結びつきというものは、通常、目にすることはできないものである。今回の調査は、都市住民の取り結ぶそのような結びつきに焦点を当てた。調査結果は今回の調査協力者たちが、彼らの「親しい人々」との結びつきを保持しており、彼らの「親しい人々」と様々な交流を行っているということを示していた。このことは、今後、より多くの調査協力者たちを対象とした調査を行っていく必要があるが、今回の調査協力者たちは、都市において決して孤立した存在ではないことを示しているともいえるだろう。

注

- 1 現代社会における都市住民の生活様式に焦点を当てた先行研究の例としては Barry Wellman の “ The Community Question ” 、 “ Networks as personal communities ” や Fischer S. Claude の “ Urbanism as a way of life: A review and an agenda ” 、 “ Toward a Subcultural Theory of Urbanism ” 、 *To Dwell Among Friends* がある。また、これらの研究では特に親族、非親族を含めて調査協力者たちが頻りに交流や相互援助を行

う関係にある「親密な関係」を分析対象としている。本稿での調査は主に Barry Wellman が2度にわたりカナダ、トロントで行った「親密な関係」に関する調査、分析方法を参考にした。

- 2 メキシコ大統領府のホームページ (<http://www.presidencia.gob.mx/mexico/>) によると、メキシコの人種構成は、ヨーロッパ系と先住民系の混血であるメスティソが60%、先住民30%、ヨーロッパ系が9%、その他が1%である。(2006/09/24 アクセス)
- 3 1990年にノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パス(Octavio Paz)は、かつて、メキシコには2つの不平等があると指摘した。それは、地域格差に代表される横の不平等と国民の中に見られる経済格差に代表される縦の不平等の存在である(パス1990)。また、作家で批評家のカルロス・フエンテス(Carlos Fuentes)もメキシコ社会に見られる不均衡の存在を指摘している(フエンテス1972)。このような格差の問題は、依然、メキシコにとって重要な社会問題の1つである。例えば、国連開発計画(UNDP)によって発行された Human Development report 2005 (http://hdr.undp.org/reports/global/2005/pdf/HDR05_HDI.pdf)に示されているメキシコの所得階層別分配率(Share of Income or Consumption)によると、上位20%に富の59.1%が集中している。このような傾向は、本文でも述べたように、他のラテンアメリカ諸国に見られるものである。例えば、アルゼンチンでも、上位20%に富の56.4%が、また、同様に、チリでも、上位20%に富の62.2%が集中している。(2006/09/24 アクセス)
- 4 この問題については、禪野美帆による『メキシコ、先住民共同体と都市 - 都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容』において詳しく考察されている。
- 5 そのため、本稿では調査協力者たちをアルファベットであらわした。
- 6 メキシコの都市における近住拡大家族の現状については、本稿の参考文献として挙げた増山久美による「メキシコ市「大衆地区」における近住拡大家族」と「メキシコ市低所得層の生存戦術としての『ファミリア』-タンダと核としての女性成員を中心に-」に詳しく記されている。
- 7 メキシコ市低所得層の家族におけるスペイン語でタンダ(Tanda)と呼ばれる「講」の重要性を増山久美は指摘している。タンダは利子や担保などの手続きなしで容易に資金を調達する方法である。
- 8 「メキシコの社会階層と子どもたち」において、田中都紀代はメキシコ社会のこのような慣習の存在を指摘している。

参考文献

- Claude, Fischer S. "Urbanism as a way of life: A review and an agenda," *Sociological methods & research* Volume 1, Number 2 (November 1972): 187-242.
- , "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology* 80(May 1975): 1319-41.
- , *To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City*. University of Chicago

- Press, 1982.
- Fuentes, Carlos. *Tiempo Mexicano*. Cuadernos de Joaquín Mortiz, 1972.
- Labarthe Ríos, María de la Cruz and Adriana Ortega Zenteno. *Yo vivo en León*. León: Ayuntamiento Municipal de León, 2000.
- Wellman, Barry. "The Community Question," *American Journal of Sociology* 84, (January 1979): 1201-31.
- Wellman, Barry, Peter J. Carrington, and Alan Hall, "Networks as personal communities," In *Social Structures: A Network Approach*, eds. Barry Wellman and S.D. Berkowitz, 130-84. Cambridge University Press, 1988.
- オスター, パトリック 『メキシコ人』野田隆・他訳、晶文社、1992年(原本: Patrick Oster. *The Mexicans: A personal portrait of people*. William Morrow, 1989.)
- パス, オクタビオ 『孤独の迷宮 メキシコの文化と歴史』高山智博・熊谷明子訳、法政大学出版局、1990年(原本: Octavio Paz. *El laberinto de la soledad*. Fondo de Cultura Económica, 1959.)
- ルイス, オスカー 『貧困の文化 - メキシコの 五つの家族』高山智博訳、思索社、1985年(原本: Oscar Lewis. *Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of poverty*. Basic Books, 1975.)
- 『サンチェスの子供たち』柴田稔彦・行方昭夫訳、みすず書房、1986年(原本: *Children of Sanchez*. Random House USA, 1979.)
- 禪野美帆 『メキシコ、先住民共同体と都市 - 都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容』慶應義塾大学出版会、2006年
- 田中都紀代 「メキシコの社会階層と子どもたち」奥山恭子・角川雅樹編 『ラテンアメリカ 子どもと社会』新評論、1994年、110-44頁
- 増山久美 「メキシコ市『大衆地区』における近住拡大家族」『家族社会学研究』第16号(1)(2004年): 71-82頁
- . 「メキシコ市低所得層の生存戦術としての『ファミリア』 - タンダと核としての女性成員を中心に - 」『拓殖大学論集(258)人文・自然・人間科学研究』No.13(2004年): 58-76頁